



# ピクタインダカン

(おさみがりにぼし)

第4号

発行日 2016年1月20日

発行人 矢代 しず

秋田市御野操7-1-29-305

## コトバを釣る

日がな釣り糸を垂らし

コトバを釣る

ちよん掛けの餌<sup>え</sup>には

見慣れたコトバが食らいついてくる

手づくりの疑似餌をつけ

思い切り遠くへ投げてみる

やがて浮きは沈み

波紋を描き動きまわる

竿を上げると

わたしをじっと見つめる

見たことのないコトバ

わたしは

コトバの魚拓を写しとり

わたしだけの辞書をつくる

## 母

年の終いの時間ときを刻む音が  
ゆっくり

胸の高さまでおりてくる

(おめでどう！)

写真の母に

今年はじめての挨拶をする

とおい昔、八畳の真ん中の丸い飯台はんたいに、

母の手作りの正月の馳走ごちそうがならび、子ど

もたちは競つてことばの箸はしをのばした。

膾なます、キンピラゴボウ、黒豆、茶碗蒸し、

煮しめ、鯉の甘煮、雑煮、白菜の漬物：

台所に

白いエプロンをかけた母がいる

幸せを約束してくれる平和の匂いを

部屋中に漂わせて――

もよう……

母はいない

それでも

母はわたしの中にいる

なにかを言いたげな

母の傍らには

一輪の薔薇

(りよっこ

迷わず進みなさい

母は

わたしに語りかける

母との記憶は あたらしい

母との距離が ちぢまる

母は わたしになる

## 抱きしめる空

うす紫いろの山脈やまなみ

固く閉ざされた北の山にも

夏がきた

ビロードの青みを帯びた山は茂みのなかに

温かく漂う陽を満たしていた

すきとおる風

ゆらめく光

したたる緑

山の生気がみなぎる

懸崖の黄色い花群のかがやき

不意の飛翔音

一本の線

どこにむかっているのだろうか

昭和十八年九月

二等兵の父は見た

移動する夜汽車の暗幕からB29を

闇夜の烈しい恐怖の照明弾を

空の穴から降り注ぐおびただしい爆弾を

やわらかい大地を裂くすさまじい音を

ニンゲンが人間を――

空を汚す

おもい影はいらない

なごやかな景色に

つめたい色彩はいらない

饒舌な瓦礫はいらない

空は

のびやかに羽ばたくものたちを

かぎりなく抱きしめる

頂のわたしは

空と同化する

どこまでも澄みきった

青い宇宙そらよ

## 徒然のエチュード II

1

詩を読む

むずかしくて立ち止まる

解説者は

どンドン読み解いていく

わたしはますます途方にくれる

2

パソコンを買い替えた

はがゆい！

十分に活用できない

指は

古いOSを覚えている

3

スーッと脚を伸ばす

身も心もひらかれ

至上の喜びが

今夜も……

ふかふかのダウンの法則

4

〇ねえ この虫

〇布地を測るように

〇くぎりくぎり歩いているよ

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

尺取を学んでるのさ

5

すべてを知りたい

はつきりさせたい

ところが立ち上がる

言葉が押し寄せてくる

危険な詩

6

行かなくても  
触らなくても  
目を閉じれば  
夢は見れる  
詩は……

7

冒されるるるる  
奇抜なスタイル  
見たこともない表現  
斬新な発想  
言葉のシャワー

8

カラスが  
空の壁を  
自由に飛び越える  
その羽ばたきは  
ウルトラD

9

猫が歩いている  
尾がかすかに揺れている  
尻尾レーダーで  
捜している  
メス猫を

10

目を大きく見開いて  
流線型の中からだを  
人目にさらし  
すぐに買われていく  
見目うるわしい魚たち

11

「刺青をいれた方は  
ご遠慮ください」  
浴場での注意書き  
心にいれた刺青は  
どうする？

12

心の濁りを  
取り除くと  
色が青に似てくる  
心の海は  
凪いでいる

13

医者が  
患者を診る  
名医は  
患者を読む  
病は削り取られる

14

プールを泳ぐ  
当然のように  
泳ぐ  
泳げない自分には  
もうもどれない

15

危ない！  
ギーガグギコガッ  
車が猫を――  
つぶれた輪郭  
赤い翳

16

青 蒼 碧  
微妙に違う印象  
あなたはどれ？

17

きょうの海上  
波  
1.5 層 後 2 層  
後つて  
いつ？

18

視線は上目づかい

まばたきは多く

課内一の色気女

納豆とオクラを混ぜたような

四十年前の甘ったるい声 いまは？

19

まだ半分

四分の一

六分の一

もある

ポジティブな考え

20

あれは

21

世界的な規模で

地球的な規模で

と偉い先生はいう

でも

お尻は自分で拭いてね

22

きつね色の皮

内側にはチョコレート

ふわふわの手ざわり

初恋のパン

愛して三十年

23

好奇心は強く

よく笑い

ありがとうと感謝し

ひがまない

美しい老いへ

母  
2行分の空白を読む

24

一日中

テレビを見ている老婆

相づちを打ったり

腹を立てたり

テレビは仲の良いお友達

25

聞いて極楽

やって天国

魔法の指が

至福をつくる

ヘッドスパ

26

怒鳴られ

苛まれ

きょうも三面記事の片隅に

魂を吸い取られた

小さな命

27

あの部屋に

だれかが引越してきたわよ

深夜

腐った臭いがし

トイレの水音が……

28

事故起こしたことある？

事故は起きないことになってるわ

えっ！

絶対起きないって信じてるの

事故は冬眠してるんだ

29

つかれる

甘いものがほしい

チョコレートを食べる

心の凝りがほぐれる

チョコは疲労判定計



うちの人 美人に目がないの  
なあに 気にすることないサ  
奥さんだつて負けてないヨ  
美人不美人  
皮一枚サ



## 落ち葉、色とりどりの

——晩秋の朝、ケヤキ並木。夜半の雨にしっとり濡れていた長い歩道に、半開きの傘の集合住宅の屋根に、幻想の世界にゆらゆら遊ぶ風花のような、色とりどりの落ち葉。せまい側溝のもぐら色の窪みに、ひしめく緑のはんさな茂みに、犬の足もとに、川のふちにもひとしきり休み飛び立つ間際に尾を小刻みにふるわせる小鳥にも、色とりどりの落ち葉。移りゆく季節の肌ざわりにも山峡の小径をサクサクと秋を踏みしめ歩いた心しずまる喜びにも、色とりどりの落ち葉。

——夕ぐれ、裸になった街路樹の下に茶色の葉脈を浮きあがらせてひっそりとしている。蛾、止まっているヤマダカレハ、と視線をじっと据えながら、日が落ちてゆく空へ飛び立てと風のようにささやくわたし。肩にも落ち葉、色とりどりの。



刹那

喪中につき新年の

ご挨拶は失礼させていただきます

母の遺影

茶湯器

腕時計

多肉質の観葉直物

静けさを湛える小菊

折り鶴一羽

部屋の片隅に

きよらかに

哀しい静けさ

刹那

こころを 寂しさに濡らす

《母の忌に思い出尽きぬ菊膾》なまき

菊の形をつくる数多の花弁

やわらかにほぐれ

くきやかに

こまやかに

もの思わせる

におい

こころを いやすように 撫でる

黄いろの香り

つんと酔のにおい

とぎれることなく

母の色

を聞く

《父の忌の間近になりて残り菊》

あのとときも……

言葉のない彼らは

ささやく風をつかまえて

においの触手を伸ばし

風に絡みつき

刹那

菊はかがやいていた

《九十を過ぎてもをんな桃花》

眼は

無意識のうちに

美しいものを選ぶ

耳は

ときとして

意味のない音を快く感じる

人は

生まれたばかりのにおい

を

五感の襞にたたみ

少しずつ

透き通っていく

やがて

淡紅の花のいい香り

を

ゆっくり

閉じたまぶたの裏に浸す

《虫干やかすかに母の匂いせり》

母は

自分を記憶させるため

色

や

におい

を

残

す

冥界

と

顕界げんがい

の

境

を

つきぬけて

刹那

ほのじろい

明滅する

母

の  
火影ほかげ

《腰おろす石のぬくもり遠花火》

\* 《》は母の俳句



SLEEPING POEM

閉じたまぶたの裏に

もう一つの夜

が目覚める

薄い膜を通して

うき

うきへ

うきへ

うきへ

ひかりのあわ

が透いてみえる

非凡な夜

ああ

水の月

が川を染めている

オーロラいろに

ゆつくり

ひかりをたたえて

夜は

車輪をまわす

の 夢

クルクル  
クルクル

ワヨ  
マ  
ル

スマリワマ  
イ  
ル  
ク  
ク  
マ  
イ  
パ  
ツ  
イ  
ワ  
ル  
ク  
ル  
ク  
ル

ひととき

月

は

我を忘れる

風の歩み

が

速まり

ちぎれる波紋

月の波

が

めくれあがり

月のかおり

が

水にとけあう

## 夢中夢

夢のしづく

が

ひとつ

空へ

飛び出る

青白い弧

を残して

川底に沈む

は 月

月は

地上を照らす記憶

をたどり

昇っていく

翡翠いろの道

を

ああ

まぶたにしみてくる

生あたたかく

美しいもの

が

もうすぐ

夜のむこう

陽の時刻とき



従姉妹から、母の未発表の句を教えてもらったので、  
第2号の母の句集に追加する。

「春裕」平成4年12月

枕元のちりばりにけり去年今年  
啓蟄に廁の窓の半開き  
夕暮になお連翹の花明り  
別の世に旅行くまでの春裕  
放牧の牛の背渡る五月風  
鍬胼胝のささくれにけり青葉光  
子守して子のなすままや日の盛り  
羅の皺を気にして葬へ行く  
上棟の弊を散らして青嵐  
新米を男結びに子に送る

【あとがき】

なんとか第4号の発行にこぎつけた。

昨年は東日本ゼミナールでの井坂洋子氏の講話、

十一月には県外の詩人の方々との交流、その新鮮な出  
会いに、さまざまないい刺激をうけた。

すぐれた詩人の器は大きい。いかなる容器にもこと  
ばが自在に変化するのである。弾力のあることば、こ  
ころに沁みてくることば、ことばの呼吸や意志など、  
メモするのに躍起になるほどだった。

今号は詩の組み立てやことばをつかまえるのに難儀  
したが、長詩と行替えに挑戦した。

わたしはよく夢のなかで、詩を描くことがある。〈夢  
中夢〉である。リアルな情景に、行分けやことばまで  
が鮮明で、勝手に字が描出するのである。

ことばを扱うのは容易ではないが、詩を作ることが  
いまは楽しい。まずは休むことなく、のびやかな詩を  
書きつづけたいものである。

\*

皆様からお寄せいただいた感想は、カンフル剤とな  
っております。ありがとうございました。

